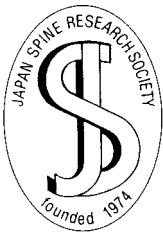


序：脊椎脊髓外科 最近の進歩 ——第 32 回日本脊椎脊髓病学会から——

河 合 伸 也*



本特集号は第 32 回日本脊椎脊髓病学会(2003 年 4 月 4—6 日)にて発表された演題のうち、代表的な内容を取り上げることで、脊椎脊髓外科領域の最近の進歩を汲み取っていただきたいという趣旨で構成されています。

本学会は日本脊椎外科研究会の名称で 1972 年に発足し、日本脊椎外科学会を経て、日本脊椎脊髓病学会に改称して現在に至っています。本学会は、脊椎脊髓の病態解明や治療法の確立に向けて名実ともにわが国の最先端の情報を議論する場であり、わが国における脊椎脊髓疾患の診療の動向を知ることが出来ます。今や、わが国の脊椎脊髓外科の水準は世界のトップクラスにあります。これは脊椎脊髓領域においてご尽力いただきました先人の整形外科医のお陰です。先人によって築かれた優れた実績に感謝し、さらに一層発展させていく責務があります。

現在では、精緻な器具と繊細な手技を用いて脊椎脊髓手術の治療成績は飛躍的に向上しました。かつては難治であった疾患もかなり良好な治療成績を得るようになりました。しかし、いまだに脊椎脊髓疾患に悩む国民の数は圧倒的に多いのが実状です。例えば、わが国の国民が持つ自覚的愁訴のうちで、もっとも頻度が高いのは腰痛と肩こりです(厚生労働省調査から)。その他の脊椎脊髓疾患に悩んでおられる患者さんの数はなお膨大です。痛みや麻痺によって生活機能や社会生活に支障を来し、QOL が低い生活を余儀なくされている人々も多く、それによる個人的・社会的・経済的な損失は計り知れない状態です。私たちは依然として解決しなければならない課題を多く抱えています。しかも、患者さんはできるだけ手術の治療を避けたいと願い、さらに可能であれば、未然に予防することができることを切望しています。

そのような趣旨に沿って今回の学会では幅広い内容の演題に活発な討論が行われました。手術療法に関する内容だけでなく、病態解明に関する基礎的研究や各種疾患の自然経過、保存的治療など多くの演題がありました。最近のトピックスとしては、内視鏡下手術やコンピューター支援手術の演題も多く含まれていました。『温かい先端医療』をスローガンにして、温かい気持ちを込めて、先端的な脊椎脊髓疾患の診療に関する情報交換が幅広く、奥深く行われました。

本特集号には、それらの演題のなかから脊椎脊髓疾患における病態解明、自

* 第 32 回日本脊椎脊髓病学会会長、山口大学整形外科教授

然経過、保存的治療から各種の疾患に対する最新の治療法と治療成績などに関する代表的内容が含まれています。わが国の脊椎脊髄領域の研究と診療のさらなる向上に資することを期待しています。

今は『運動器の 10 年』の時期です。運動器のなかで、脊椎脊髄は根幹ともなる大切な構成要素です。脊椎脊髄疾患の予防や病態の解明を通して、質の高い生活機能を温かく提供することによって、国民の願いに応えることが私たちの役割です。運動器の障害は個人の苦痛や苦悩だけでなく、社会にとって大きな損失です。運動器の障害によって社会は労働力を失い、福祉的支援整備に膨大な経費を要しています。この傾向は人口の高齢化に伴い、さらに増加していきます。脊椎脊髄疾患の領域においても高齢者に対応する機会が増加します。それが『運動器の 10 年』世界活動の理由の 1 つです。この活動が世界的にさらに推進されることを祈念しながら本特集の序文とします。
